

幼児期の子どもの読書の必要性とその効果

秋田喜代美

赤ちゃんからの絵本との出会いと 幼児期の読み聞かせの長期的な効果

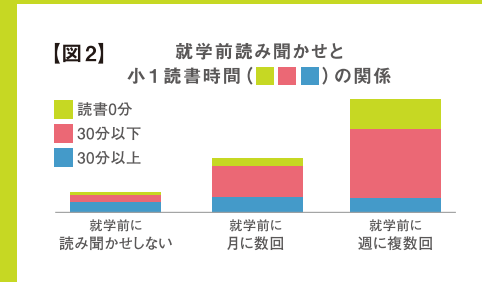
子ども読書年である2000年に、「ブックスタート」という活動がイギリスの活動を取り入れながら日本でも始まりました。今では類似事業も含めれば全国の約8割の自治体でこの取り組みが行われています。親子で絵本を分かち合い楽しむ“Share books with children”の理念と共に、地域の図書館やボランティアの方々に支えられながら、この活動は単に絵本を子どもに読むということだけではなく、それによって親子の情緒的な絆を深め、地域で子育て支援をする輪を作る役目も果たしてきています。子どもと絵本の出合いに対する意識を変えてきたものと言えます。まさに子どもまん中社会の出発点が、絵本で作られています。

しかしながら、残念なことに0～2歳時期には絵本と触れ合っていた子どもたちも、3歳をピークに現在では家庭で読み聞かせをする時間や頻度が減ってきていることが明らかになっています。乳幼児期は、絵本

へ関心を示す時期やどのような絵本に興味を持つかは子どもによって個人差はありますが、どの子ども自分に向けて絵本を読んでもらうことが大好きです。そしてこの習慣を幼児期に培うことが、小学校以降の思考力等にも影響を及ぼすことが日本でも実証的に明らかにされてきています。

筆者らはベネッセ教育総合研究所と共に、3歳時期から中学3年生までの子どもたちを長期縦断研究(※1)で調べました。この結果からは、幼児期の保護者の子どもへの読み聞かせの頻度が、小学生の時期に子どもが一人で絵本や本を読む(見る)頻度に影響を及ぼすこと、またさらにそれが、中学1年生時の子どもの「言葉スキル」(かなや漢字・文章を正しく書ける力)や「論理性」(原因と結果のつながりを考えたり、相手と自分の意見を比べたりしながら、話したり、書いたりできる力)といった認知的発達にも影響を及ぼすことがわかりました。

幼児期の読み聞かせで、内容について質問したり、子どもの質問に答えたりするという双方向のやり取り



(読書体験共有)に時間をかけている家庭ほど、小学校低学年の時期に、保護者と子どもの間で本の内容について話し合ったり、感想を述べ合ったりするという読書体験を共有することが多く、それが小学校高学年での子どもの一人読みの頻度にもつながっていました。ですから幼児期の読み聞かせは、子ども自身が一人で本を読む活動、ひいては言葉スキルや論理性につながっていることがわかります。だからこそ、幼児期からの絵本の活動は、資質能力を育む大事な活動と言えます。

二分化していく読者層

絵本の読み聞かせが、前述のような効果をもたらすのはなぜでしょう？ 子どもの読書量の変化を、長期縦断的に調べたのが図1です(※2)。このグラフからは、小学1年生で読書をしているか or していないかの割合が、その後中学生頃まで変化しないということがわかります。またこれは2000名の子どもたちを長期的

【引用文献】
ベネッセ教育総合研究所 2022「幼児期から中学生の家庭教育調査・縦断調査」
https://berd.benesse.jp/up_images/publicity/pressrelease_20230915_.pdf
秋田喜代美・濱田秀行 2024「9章 小中高校生の読書行動の7年間の縦断的变化とコロナ禍による影響の検討」
「パネル調査にみる子どもの成長：学びの変化・コロナ禍の影響」勁草書房

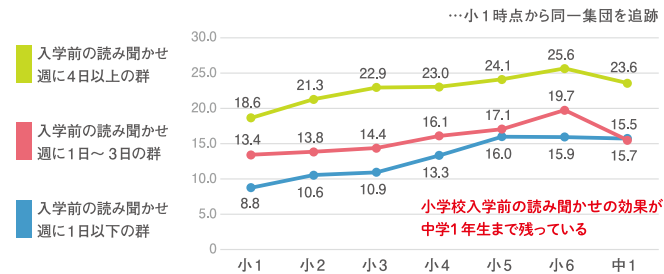
に追ったものですが、ここからは小学1年生で家庭での読み聞かせをほとんどしない不読層がすでに15%ほどいることもわかります。

図2は、就学前の読み聞かせ頻度と小学校に入学してからの読書時間の関係性を表したものです。この図からは、就学前に読み聞かせをしなかった、あるいは月に数回読み聞かせをしていた層の小学1年生での不読率が高いの比べ、就学前に週に複数回読んでいた層の入学後の不読率が少ないことがわかります。不読かそうでないかは家庭の世帯年収は関係ありませんが、小学1年生の段階で、すでに女子よりも男子の方が不読率が高いというジェンダーによる相違があることもわかってきています。

幼児期に魅力的な絵本と出会い、保護者や保育者に興味関心のある内容の絵本を読んでもらい、みんなで読む楽しさや喜びを分かち合うことが、小学校以降の読書習慣にもつながります。この意味で乳幼児期の読み聞かせは、大人から子どもへの素敵なプレゼンになるものと言えます。

(※1) ベネッセ教育総合研究所, 2022,
(※2) 秋田・濱田, 2024

【図1】 小学校入学前の読み聞かせ頻度別のその後の読書時間



学習院大学教授 教育学・発達心理学者

秋田喜代美 あきた きよみ

学習院大学文学部教授。東京大学名誉教授。博士(教育学)。専門は、保育学、発達心理学。こども家庭庁子ども家庭審議会会長。文部科学省令和4年度子どもの読書活動推進に関する有識者会議座長。NPOブックスタート理事。絵本専門士委員会委員長。主な著書に『絵本で子育て：子どもの育ちを見つめる心理学』(共著・岩崎書店)、『歌と絵本が育む子どもの豊かな心：歌いかけ・読み聞かせ子育てのすすめ』(共著・ミネルヴァ書房)

